

# 草庵仏教

第119号  
(発行日)  
2000年5月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX (0798)  
41-5346  
(発行人)  
土井 紀明  
Eメール：naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋仏壇店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 浄土の光を受けて

親鸞聖人のお言葉に  
「煩惱具足の衆生は、もとより真実の心なし、清浄の心なし。濁悪邪見のゆえなり。」

(尊号真像銘文)

「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。」(教行信證信巻)

「一切の生きたし生けるものは始めの昔から今日、今の今まで、煩惱と罪にそまつて清浄な心はない。いつわりやへつらいをなし、真実の心がない。」

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごとたわごとまことあることなきに」(歎異鈔)とも申されている。

人間は、真実の心がない。すなわち心のなさは虚しく、偽りやへつらいや曲がつた見解を持つている。清浄の心がなく、欲深くおしみ心が強い。怒り腹立ちがやまず、ねたみ心が深い。しかも真実の道理にくらく愚かなるもの。それが人間の赤裸々な姿であると

いわれる。

「もとより」というのは本来そうだといいこと、本質ということである。

聖人には「逆謗の死骸」という言葉もあり、人間は真実に背いていて死骸に等しいものと言われる。

これらのお言葉から感じられることは、人間性は破綻している、自分も他者も、人間の本来は絶望的な存在であるということである。

考えてみれば、聖人のこうしたお言葉は恐ろしいほどの内容である。こんな言葉を聞く、現代の多くの人は否定し、受け付けられないのではなからうか。

では世間はどうかであろうか。社会といっても人間同士の総体の外にはない。一人一人が虚仮であり濁悪であり邪見であれば、社会が虚仮であり濁悪であるの言うまでもない。

要するに、救われがたき人であり救われがたき世である。もちろん、これは聖人の時代だけの話ではない。聖人が申されるのは、特定の時代の人はなく、あらゆる時代を通じての「人と世の本質」を言われている。

「人間に真実はない」ということを身近なところから考えてみたい。

自分自身を真剣に内省して

みると、「いつまでたっても変わり様のない、お粗末な人間性の私」であることを感じないだろうか。私だけではない。周りの人を見ても、「あの人もこの人もどうにも自分を変えようのない人たち」という思いが湧かないであろうか。自分にはたいして周りに対しても、どれだけこういう嘆きを重ね、どれほど失望してきたことであろうか。あと「しかたがない」という不足、不満、やりきれなさをどれほど感じてきたであろうか。

「どうして、どうして、どうして」はしかながらけつして不可解なことではない。「もとより」人間はこうした存在であるというのが、親鸞聖人のご指摘ではなからうか。

親鸞聖人のかような人間観は、浄土の教を聞いていかれるなかで、受け取られたものである。親鸞聖人の人間観と

それは、「仏説無量寿経」に説かれていた法蔵菩薩の願行の物語からあぶりだされる人間がまさに聖人の人間観となつたのであろう。

釈尊は仏説無量寿経の中に如来の本願の起こりと完成を説かれていた。阿彌陀仏が法蔵菩薩として立ち上がらなければならなかったか。

それは「真実の心なく、清浄の心なき」人間の有様を観じられ、それ故に「苦惱せる人と世」を大悲されたからである。「ありのままの人間のすがた」を根底から知り抜かれ、これを救おうとされたからで

ある。人とは世間は闇である。あれはこそ、法蔵菩薩はこれを救わんとして立ち上がられた。五劫に思惟して四十八の誓願を建て、永劫に修行された。その結果、阿彌陀の浄土が開かれ、万人救済の念仏の法が実現したのである。

さて、先に述べたように、社会は人間同士の総体にほかならない。社会の構成単位は一人一人の人間である。人が虚仮であり濁悪・邪見であれば、それを構成単位としている社会が虚仮であり濁悪である。苦の世界であるのは言うまでもない。いつの時代になろうと、社会の表面は変わっても本質は変わらない。

今日の政治団体は多くは利益団体であり、政治家の多くはグループの利益代表ではない。政治運動はしばしば権力闘争であり、理想国家の建設はともすると新たな地獄を生み出した。ユートピアを作ろうとする歴史は、逆に反対者を弾圧し抹殺する歴史でもあった。



とねりこ

今朝の新聞に「一九八六年四月に発生したチェルノブイリ原発事故で、事故処理の作業に従事した作業員3万人以上の人たちがこれまでに死亡し、その38%が将来を悲観しての自殺であることを、ロシアの保健当局が4月(二〇〇〇年)20日に発表した」との記事が出ています。昨年我が国でも核燃料工場での爆発事故があり多くの人が被爆し作業員2人が死亡した。こういう事故は大なり小なり世界の各地で今後も続くであろう。これは人類的な規模で生存が脅かされている一例ではない。21世紀は我々の想像もおよばないような新たな困難や問題が出てくるのではなからうか。

「20世紀を要約するとすれば、この世紀は人間によつてかつて考えられた最大の希望を奮い立たせ、そしてすべてのビジョンと理想を破壊してしまつた世紀である」と言っている。

ではこのような人間、このような社会の現実、ただ失望するだけしか道はないのであろうか。自己を嘆き世を悲しむしかないものであろうか。そうではない。浄土の教は「人の本質は破綻しているし、人間の世界は闇である」とだけ語るのではない。人間と世が闇だからこそ、法蔵菩薩はこれを救わんとし、五劫に思惟して48の誓願を立て永劫に修行されたのである。その結果、阿弥陀の浄土が開かれ、万人救済の念仏の法が実現したのである。

このような法蔵菩薩の願行によつての完成された「浄土」の内容は基本的に二義ありと教えられている。

一つは「浄らかな土」すなわち浄らかな世界、清浄な領域という意味で、涅槃界とも極楽ともいわれ、無智と煩惱の全てが消滅した智慧と慈悲の支配するいのちの領域。浄土こそまことの安樂の実現している境。であれば浄土に衆生を生まれさせて悟りを完成し、無明煩惱を完全に浄化して仏陀たらしめる、そのようにな悟りを開く境界が涅槃界ともいわれ、彌陀の浄土ともいわれている。親鸞聖人は「唯信鈔文意」に



「涅槃界というは、無明のまどいをひるがえして、無上涅槃のさとりをひらくなり。は、さかいという。さとりをひらくさかいなり」と申されている。

かようにさとりを開く領域としての浄土のほかに、濁悪動乱のこの世(穢土)を浄化する働きを浄土という。「土を浄化する働きが浄土の働きである。」

この浄土の働きに促されて人びとの心に正義と眞実を求める動きが現れてくるのである。

それは具体的に言えば、20世紀は先程述べたようにまさに濁悪な様相を呈した世紀であるが反面、近代は人間の平等で自由な存在であること、自覚し、それによつて民主主義による政治的な自由と平等な人権を実現してきた歴史でもあつた。そして、人間は悪だけできているのではない、そこに平和を願い、平等な社会を願つて生き、苦しんでいる人びとを助けたいという欲求も起こり、またそれを実現しようという行動も起こるのである。

うという行動も起こるのである。眞実の心はなく、清浄の心はない人間、にもかかわらず平和と平等と苦しむ人びとへの援助を願う。そういう尊い願いが起こるのにはなぜか。それは浄土の働きが万人に働いているからである。

ただ、己の本来もてる悪業や煩惱にさまたげられ振り回されて、純粹で正しい行いが容易にできないのである。浄土からの智慧と慈悲の働きは我らの心をうながし、善を求め、眞実を求める動きとして現れてくる。

しかし、私たちはこうした浄土の働きに目覚めない。浄土の働きを受けておりながら、欲望と怒りとねたみの衝動にかられて、人間関係をそこない、自然環境をそこない、人類の行く末を危うくしている。

私どもを仏たらしめたいとの浄土の働きに目覚め、この働きの力に信順して浄土への人生をたまわることが、積尊によつて勧められているのである。眞宗の信心をいだいて生きるというのはこの浄土の働きを自覚的に受け取つていく道であるといえる。阿弥陀仏の大悲の力を我が人生の上にとりだき、讃え、映していく、そのことが自然に世の中の濁乱を浄化していく道となる。

世の中が平和であることが可能なのは、浄土の働きを人の上にもすまます働かしめる以外にはない。

要約すれば、法蔵菩薩が一切衆生を救済するために建立した本願は、法蔵の修行を通じて、実働せられては、このことの起こりは、人間は自らを救うことが出来ないほどの罪濁の凡夫であり、それによつて構成されている社会は、濁悪の世であるからである。それを見すえて建てられたのが阿弥陀の本願である。

ここに人間の本質とこの世の姿が露わとなり、どこに人間と世界を救う光があるかが明かされているのである。だから、我も人も、ともに阿弥陀仏の大悲の活動を受け入れ、阿弥陀仏の光明に照らされ、阿弥陀仏の光を映す器たれよと、阿弥陀仏から願われ、求められているのが、私たちの存在である。(了)

### 【電話相談室】

(秘密厳守・匿名可・無料)

(時間)

午前8時より午後10時まで

(電話)

0798-41-5346

(相談内容)

人生上のいろいろな悩み・信仰上の相談・仏事の相談  
\*相談員が留守のときがありますので予めご承知ください。

# 真宗聖典講座

つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなどいふこと、不可説なり。如来よりたまわりたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。自然のことわりにあいかなわれば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々

## 〈歎異鈔第六章第四講〉

「自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々」

今回は、この一節を読んでみたいと思います。自然は「じねん」と読みます。「じねん」と読む場合は、親鸞聖人のおぼしめしでは阿彌陀仏の本願力をさします。だからいわゆる私たちがいう「しぜん」とはいささか異なっています。

親鸞聖人が「自然（自然）」といわれる例は、聖人の法語である「自然法爾章」に

「自然というは、自は、おのずからという。行者のはからいにあらず、しからしむということばなり。然というは、しからしむということば、行者のはからいにあらず、如来のちかいにてあるがゆえに。」と記されています。

ここに述べられていることは、弥陀をたのむ念仏行者が浄土に生まれることは、ひとえに阿彌陀仏のちかひの力によって浄土へ生まれしめられるのであり、凡夫の側からはからいによるのではないことをいわれるのです。ですからここでいう自然は阿彌陀仏の本願他力の働きをさします。

「自然のことわり」といわれる本願力はおのずからなる救いの働きであって、それはあたかも法則のようなことわりであるといわれます。ことわりとは

道理ということ。法然聖人はこのことを法爾道理といわれ、次のように述べておられます。

「法爾道理という事あり。ほのおは空にのぼり、水はくんだりさまにながる。菓子の中にすき物あり、あまき物あり、これらはみな法爾道理なり。阿彌陀ほとけの本願は、名号をもて罪悪の衆生をみちびかん」とちかいたまいたれば、ただ一向に念仏だに申せば、仏の來迎は、法爾道理にてそなわらるべきなり」

火が空に昇り、水が下にくだる。菓子（くだもの）にすっぱいものもあれば、甘いものもある。こういうことは人間が計らい工夫するからそうなるのではなく、天然自然の道理としてそうなっているのです。おのずからなる不可思議な仏の誓願力によって、浄土へと導かれ生まれてゆくのであると仰せられます。

花は自然の不思議なはたらきによって、おのずから咲く。人間の手出しによつてではなくして、咲く。それはおのづからではあるが、まことに不思議な神祕に満ちたできごとです。

あたかもそのように弥陀の本願を二心なく信じる信心の行者はおのずから往生浄土の花が開くのです。それは仏の不可思議の利益によつてそうなるのです。それは法則のように「そうなつてしまつていふ」ようなものです。人間のはからいのまつたくまじわらぬ定めですから、法則と言えましょう。そこを聖人は「一念多念文意」に

「法則というは、はじめて行者のはからいにあらず。もとより不可思議の利益にあずかること、自然のありさまともうすことをしらしむるを、法則とはいふなり。一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを、法則ともうすなり。」と申されています。

次に「自然のことわりにあいかなわば」というのは、阿彌陀仏の本願のことわりになうということ、念仏往生の誓いにすなおに応じること、信順することです。阿彌陀仏のお誓いにお任せすることです。お任せすれば、誓約の通りに運ばれていく。阿彌陀仏のお力で浄土へと率（ひき）いてくださるのです。「尊号眞像銘文」に聖人は

「眞実信をえたる人は、大願業力のゆえに、自然に

浄土の業因たがわずして、かの業力にひかるるゆえにゆきやすく、無上大涅槃にのぼるにきわまりなし、とのたまえるなり。」

阿彌陀仏の願力にひかれて無上大涅槃に至ると述べておられます。

こうして浄土へ生まれるべき身となさしめてくださったのは、我が賢きにもよらず、我が徳にもよらず、我が修行にもよれません。そういう智慧も徳も修行もまつたくない我らは、ひとえに阿彌陀仏のご恩によつて浄土に生まれるのです。

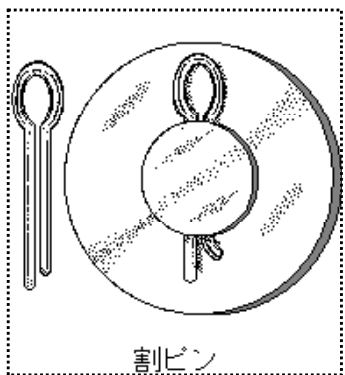
それはまた阿彌陀仏の本願を生涯かけてお伝え下さり、教えてくださった善知識（師）のおかげであります。

仏恩・師恩は、信心から知られてまいります。信心は仏恩を知るほかにないからです。仏恩を知れば、仏恩を私どもに知らせて下さつた師のご恩も知られてくるのです。

最後に、師というのは弟子の方が敬つて使う言葉です。「私がお前の師である」と言つて、自分の方から「師をおしつける」べきものでは当然無いわけです。

たとえば親鸞聖人はご門徒の皆さんを「とも同行」（御同朋・御同行）と呼ばれています。聖人から教えを聞かせていただくご門徒方は「我がよなき師」と敬われたのであつて、ご門徒は「親鸞よ、我が友よ」とは言つておられないのであります。「師」は自分についている言葉ではなくて、教えていただいた恩を知つた者がそのお方を敬う心から用いられる言葉です。なお釈尊も「我は汝らの師なり」とは言われず、お弟子を「友よ」と言われています。

(了)



割ピン

# 吉右衛門の婆の言葉

江州大浜の吉右衛門の婆いわく。

「この婆々は一生涯信心が得たい得たいと思つていたが、信心あたえようと、この婆々はケガすると思し召し、とうとう今日まで信心与えて下さらなんだ。まるきり助けられねば参られぬ婆々であったと、お助けに逢わせてもらいました」

吉右衛門の婆(奥)さんは、滋賀県東浅井郡大浜にいた女性である。宮川の妙忠と稲葉のこう女と並べて湖北(滋賀県北部)の三幅対といわれ、湖北では知られた厚信の女性であった。江戸の末期から明治にかけて生きられた妙好人である。

ここに載せた彼女の言葉から、いかに熱心に聞法し、長年聞法に苦勞されたばかりでなく、その信心が徹底したものであるかが分かる。

彼女にこんな逸話がある。寝ていた部屋の天井に一本の傘がかけてあった。姪の稲葉のこう女に、「私はね、聴聞や仏法の談合に出るのが夫の氣にいらぬというので、もしや暇をだされるなら、何時でも出て行かれるように、一本の傘を用意しておくのじゃ。お前もそれ位の心がけでいなされや」と。これほど聞法に身を入れて生活されたのである。

それでも「この婆々は一生涯信心が得たい得たいと思つていたが」といわれるのであるから、なかなか阿弥陀仏のお心がいただけなかつたものと思う。「信心をいただいたつもり」の人とか、「早わかりして腰を下ろして」いる人は多い。けれどもこの婆さんは、どこまでも己の心に忠実であつたと見えて、人からはひとかどの仏法者といわれ信者といわれても、自分は「まだどうも本当には仏法をいただけではない」という何とも心の晴れぬものを、自分にごまかすことなく持ち続けていったのだと思われる。「どうしても信心がいただけぬ」という嘆きを長年

持ち続けたであろう。でないと、こういう言葉は到底出ないのである。

聞いて聞いて聞き抜いて、欲しいと思つていた信心が手に入ったかというのと、全く当てがはずれて、自分が思い描いていた信心はどうとういただけなんだと言われている。

私の思いこみで願つていた信心を、もしもらつていたなら、おそらく私は「ケガをした」であろうと。ケガをしたとは「これで私の心に信心を得た」とうぬぼれ、人に対して「オレは信心を得た」と誇り、信心の無い人を見下したりしていただろうと。

それまで自分が思い描いていた信心というのは、なにか自分の心に「これでこそ信心」「これでこそ信心をいただいた」と、自分の心に何か特別の有り難いものが出来るように思つていたのである。

ところが何年聞いても、私が当てにし、想像し、欲しいと思つていたような信心は起こらなかつたし、与えられなかつた。もう全く当てがはずれ、信心だの安心だのというような特別なものは何一つ無い。空っぽの心があるだけ。全くの無信、無仏法の身が残るだけとなつた。

そういう暗黒へ落ちるより仕方ない空っぽの身、すなわち出離の縁あることなき身が残つてしまつた。仏法らしきものは自分の中に何一つ無くなつてしまつた。焼けぼっくりのように転がっている無知無能の死骸でしかない無仏法の我が身。

そこにはからずも「そのままなりを」と仰せ下さる大悲のお心が届いた。不可思議の喚び声が響いた。「まるきりタスケル」の一言、「まるまる引き受ける」の仏の仰せを賜つたのである。「もうもうまるきり助けてもらうばかりであつた」と。こちらの用意も準備もチリばかりもいらぬ。全面的に助けていただくばかりであつた。

まことに弥陀の本願は「タスケル」の仰せであつた。この仰せを仰いでいるほかに信心というものは無い。あるのは弥陀の仰せばかり。仰せの外に私の心に信心の色は何もない。仏法らしきものは何も無い。相変わらずの空っぽの心があるばかり。ただただ「汝を引き受ける、タスケル」という仰せを仰ぐ

ばかりであつた。「救われぬ身にしみわたる御名の声」である。助からぬ身が助かる身となつて助かるにあらざ、助からぬ身のまんま助けて戴くより仕方が無く、それゆえ大悲のご恩の外に私の助かる種はないのである。ただただ「如来様なればこそ」と、如来のご恩が喜ばれるばかりである。

こういうのがこの吉右衛門の婆さんの言おうとされる意ではないであろうか。

(了)



リンネ草

